

(三) 北野天神縁起絵巻きたの てんじんえんぎ えまき

津田天満神社つだてんまじんじや 飾磨区構かまえにある津田天満神社には、菅原道真すがはらのみちざねが祭つてあります。

道真は、九才のころには、日本と中国の学問を深く修めていたというたいへんすぐれた学者で、そのころの役人の多くは、道真から教えを受けたといわれ



津田天満神社の北野天神縁起絵巻

ています。天皇が、藤原氏の力をおさえるために、道真を重く用いると、藤原時平ふじわらのときひらたちは、はかりごとをもって道真をおとしいれました。そのため、道真は、九州へ追いやられ、二年後に病気がもとで、五十八才でなくなりました。

その後、京都では、日照りや火事などのわざわいが、次々と続いたので、道真の死を惜おしんだ人たちは、道真をおとしいれたために、このようなたたりがあるのだといいたてました。そこで、朝廷は、道真の霊れいをしずめるために、京都の北野きたのに神社を建てて、道真を祭

りました。これが北野の天満宮です。それから全国に道真を祭る神社が、たくさん建てられ、人々に天神さまと敬うやまわれました。現在は、学問の神様として各地に祭られています。

『北野天神縁起絵巻』は、道真を祭る北野の天満宮の由来を描いたものです。その中には道真の一生の物語、道真の霊がたたりをするので天満宮を建てた話、天満宮を信仰して救われた話などが描かれています。

津田天満神社の『北野天神縁起絵巻』（三巻）は、一二九八年（永仁六年）、藤原親泰が奉納ほうのうしたものです。わが国の『北野天神縁起絵巻』のうちでは、三番目に古く、やわらかい感じの絵で、国の重要文化財に指定されています。

姫路には飾磨区英賀あがの英賀神社にも、『北野天神縁起絵巻』（三巻）があります。

菅原道真 津田天満神社の近くに、今の船場川にかかった思案橋しあんばしがあります。この橋の西詰つめに、道真が九州へ流されるときに休んだと伝えられる跡が



菅公小憩伝説の地

あります。そこには、史跡菅公小憩伝説地と刻んだ石碑と、道真の銅像と、歌碑が建てられています。

歌碑には、

東風ふかば

にほいおこせよ梅の花

あるじなしとて春な忘れそ

と彫ってあります。この歌は、住みなれた都を、いよいよ、去らなければならなくなったとき、自分の屋敷にあった梅の花を見ながら、心をいためて歌ったものです。

今は、思案橋から海まで、かなりの距離きよりがありますが、平安時代は、このあたりまで海でした。道真は瀬戸内海を西へ行く途中、この入江に船を止めてしばらく休みました。このとき、これから先のことをいろいろ思案したので、思案橋の名がついたともいわれています。

道真が、姫路で休んだというような伝説は、的形の天満宮にもあって、境内の高さ一メートルばかりの石に、腰こしをかけて休んだといわれています。そして、この石が、今のお宮のご神体になっています。そのほか、高砂市の曾根そねにも休んで松まつを植えたという伝説があります。こんなたびたび休んだとは考えられません。しかし、このような伝説が各地にあるということは、それだけむかしの人々が道真を尊敬し、その信仰の深かったことを物語っています。

また、次のような伝説もあります。

道真が飾磨に立ち寄り、瀬戸内海のすばらしい景色を見て、心をなぐさめて

いた姿に、森の若葉も感激し、うちふるえました。やがて、日も傾き、向かいの家島群島が紫色にかすんだころ、なごりを惜しみながら、一行の船は出発しました。すると、それまで静かだった海岸に、にわかには風が起こり、そのあたりに生いしげっていた葦が、いっせいに道真の方へ葉をさしのべ、風がおさまっても、元へ返らなかつたということです。それで、この葦を片葉の葦と
いっています。